

## 勝子とキクの間 (我はいかにして途上国学徒となり しか 第二話)

著者	塩田 光喜
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	45-45
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.20561/00045711">http://doi.org/10.20561/00045711</a>

# 我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

## ◎第二話 勝子とキクの間

祖母キクの生家は讃岐荘内半島の付け根、詫間とは反対の南の地、仁尾の泰田家である。こちらには平家の落人伝承がある。源平屋島の合戦で敗れた平家の一騎が落ち延びたという。祖父方、祖母方、いずれを辿つても敗け組の子孫というわけである。

仁尾は三方を小高い山に、南を遂灘に囲まれた小さな平野に開けた町だが、外に通じる四つの峠のうち、詫間峠を登り切った詫間越えで、泰田の一派は源平の戦の後七〇〇年を農家として過ごしてきた。

仁尾の町から田畑を突き抜けると峠道に入るが、うねうねと這い上がるつづら折りを歩いて行くと、左手に泰田の自家の屋敷が見えてくる。そこから振り返ると、眼下に仁尾の町の家並みとその彼方に瀬戸内海が一望される。

曾祖父、慶吾は明治一〇年、詫間越えに生まれた。おそらく、毎日、仁尾の町と瀬戸内の陽を照り返して白く輝く海を見つめながら幼少時代を送っていたのであろう。小学校を卒業すると、曾祖父は家督を弟に譲り峠を降りて、仁尾の町の松江とい

う名の商家に丁稚に入った。仁尾には当時、松江と松賀屋という二大商家があった。小男だが、頭が切れて胆の座った曾祖父は、瞬く間に手代から番頭へと駆け上がった。泰田の家でも流動する明治の世が始まっていたのである。

慶吾は、仁尾の商家、真鍋家の長女コヲと結婚する。曾祖母コヲは明治一八年、日清戦争の年に生まれた。幼時、病弱を案じたコヲの母が身体強健になるよう四国八カ所を共に巡礼したという。お大師様の功験だろうか、曾祖母は丈夫で長命し、昭和四四年まで生きた。享年八五。当時としては抜群の長寿である。

コヲと結婚した曾祖父慶吾は、仁尾を出て大阪の通信局に入る。その地で長女よし江が生まれ、塩田の高祖父がちゃんまげを落としたその年、日露戦争の年に祖母が生まれる。慶吾とコヲの若夫婦は、日露戦争を祝して祖母を「勝子」と名付けた。時代の気分がひしひしと伝わってくる命名である。

曾祖父は、詫間越えの両親のもとに、電報でその旨知らせ、町役場に届けるよう頼んだ。

天保（つまりは江戸時代）生まれの泰田の高祖父、高祖母の怒るまいことか。「こなたな男勝りな、勝ち気な名前はいかん」ということで、勝手に「キク」と届けてしまった。祖母はよく「ドンドロ、おキクはんや」とボヤいていた。そう、文楽や落語の「播州皿屋敷」のヒロインの名である。泰田の高祖父、高祖母も、頭はまだ江戸時代だったのである。泰田の高祖父と曾祖父の間には、「キク」と「勝子」の差だけ、ジェネレーションギャップがあったのだ。

時代は激しく流動していた。曾祖父母は、高祖父母に懲憑されて、祖母が三歳の年に仁尾に帰る。そこで、曾祖母コヲは思いもかけぬことに遭遇する。

（しおた みつき／アジア経済研究所 貧困削減・社会開発研究グループ）